



Title	小さなものの
Author(s)	高原, 耕平
Citation	臨床哲学. 2016, 18, p. 138-158
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60604
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

小さなもの

小さなもの

高原耕平

小さな人たち

ポスト・シュリーフェンプランのフラグメントロギー

哲学と大きなもの

夜間飛行

ジガバチの狩り

図書館と焼夷弾

統合について

ふと

とまどい

まばたき

凝視と死者

ライラック

それから…、それから…、

瓦礫について

区画整理

弁証法と血小板

巡礼

参考・参照文献

補記 論文としての投稿について

小さなものたち

小さなもの。ささやかなもの、かすかなもの、ふと消えてしまうもの。見つけると少し嬉しくなるけれど、手に摘む気にもならず、立ち去ればまた忘れてしまうようなもの。ケータイを取り出して撮影するのもわざとらしく思えてしまうもの。

小さなもののは、小さなものたちである。虫、葉っぱ、こども、種。インターフォンのそばにへばりついた丸いまゆ。本棚のへりで萎れてゆくブーケ。トロントで集めたこまかなしシート束。妹の腕のなかの、生まれたばかりの初子。ひとの行き交うキャンパスの石畳を横切ろうとするダンゴムシ。会話の最中にふと目を脇に逸らしたときの、相手の非難するような眉のゆがみ。靴下を脱がしながら最後にあらわれる足の指。春の側溝の流れの中で水草がつくるこまかなの泡。

小さなもの、かすかなもの、つかもうとしてもかえってばやけてしまうもの。それらを、強引に捕獲するのではなく、小さなものを見なまま、その小ささにおいて、小ささを受け取ること。足を止め、膝をかがめ、小ささとの出会いのなかに半身を預けること。それはときに、詩人や写真家の仕事である。では、哲学は何ができるだろうか。

ポスト・シュリーフェンプランのフラグメントロギー

哲学にできることは、わたしたちが小さなものの経路をたくさん持っていることを示すことである。けれども、もうほんとうにわずかなものしか残されていない。

カール・レーヴィットは、19世紀をフランス革命から第一次大戦までと規定した。だとすると、20世紀は第一次大戦から始まるのだろう。ロシアの総動員を引き金に、ドイツのシュリーフェン・プランが起動し、鉄道網が兵士たちをフランス国境へ集中させる。ヴィルヘルム2世が参謀総長小モルトケに自国の総動員を停止できないのか下問するが、小モルトケは既に戦争計画は開始しており停止できないと答える。人間が作り出したシステムでありながら、それが生む強大な力の発現を人間がコントロールできない。20世紀は力の発現の時代である。イギリス首相ロイド・ジョージは、陸軍大臣キッチナーが言った数を自乗して2倍し、念のためもう2倍した数の機関銃を各大隊に配備せよ、と言う。世界の全事象をエネルギーの相互投射の量に置き換えるこの傾向は、マンハッタン計画でピークに達する。ロスマラモスの砂漠で世界最初の核実験が行われ、オッペンハイマーはバガヴァッド・ギーターを引用して「千の太陽が一度に輝き…」とつぶやく。

ところが、20世紀は心的外傷の時代でもある。外傷は、力が荒れ狂った後の、静けさの体験である。静けさとは安息を意味しない。出来事と身体から徹底的に意味が弾き飛ばされたあと、声とことばがそこに血小板のように集まってくるのを待っている時間、そのひとが再び語り始めるのを待っている時間である。

力が吹き荒れ、もはやほんのわずかなものしか残っていない。整列され秩序付けられたものは、もはや信用できない。よどみなく語られる正義は寒々しい。断片化されたもの、ひとつずつ繋ぎあわせてゆく作業を要求するもの、合理的な連関を失ったことばや身振り。爆心地の淵、環状島の波打ち際で採集されるのは、こうしたものである。瓦礫と、瓦礫でないもの、それらを見分ける術が必要である。あるいは、瓦礫の下から聞こえてくるものを聞き分ける術である。

けれども、瓦礫とは、かつて建てられていたものが、力を受け止めたあとに取るすがたである。建てられていたものは意味である。残存する意味連関を反省と吟味によって補強するのが哲学の唯一の仕事だろうか。むしろ、さまざまな破片は意味連関のすきまやひびに芽吹いているのではないかろうか。だとすると、強靭な意味連関をゆるめ、ほどいてゆくことが、哲学のもうひとつの役割であって、そのとき不合理なものやわずかな痕跡への経路が確保されるのではないか。

哲学と大きなもの

哲学は、大きなものについてばかり語ってきた。カンタベリのアンセルムスは、これ以上大きなものを想像できないほど大きなものを想像せよと言う。アリストテレスは原因の鎖をたどって不動の動者にたどりつき、万物の運動を説明する。デカルトは蜜蠍といった手元の小さなものを文章に出すこともあるけれど、その一方で惑星の動きを支配する渦巻きについて言及することを厭わない。ライプニッツは議論の対象をこの現実世界だけに留めず、神が創造に先立って想定した無数の可能世界とそのひとつつの完全性について考えをめぐらせる。カントの地理学講義は日本の習俗にまで及ぶ。ヘーゲルの歴史哲学はオリエントの古代文明から始まって、ヨーロッパの歴史全体を精神の運動とみなす。キルケゴーはなるほど神に対する人間の卑小さと当時のデンマーク教会の尊大を並べるけれども、かれの言う単独者の実存は、人間の背になんとか載るか載らないかというぐらい重たい。「小銭」で語ることを求めるフッサールも、全ヨーロッパが不死鳥のごとく灰から再生すべきことを訴える。ハイデガーは言及の対象を「惑星」にとどめた分まだ謙虚かもしれないけれど、ソクラテス以前の始原に遡って形而上学の歴史を解体するというプロジェクトの壮大さは他の追随を許さない。宇宙を構成する最小の実体、それ以上分割しえないものとしてのアトムを論じたデモクリトスも、万物をそれによって説明しようとしている点で大きなものを語っている。

哲学が小さな目に小さくゆらいでゆくようなときも、たまにはあってもよいのではないか。それはまた、諸学のなかで、哲学にしかできないことなのではないか。

大きなものが雄々しく語られるとき、小さなものはつましく身を引いている。科学が確かな方法によって確かなものを確かに獲得しているとき、小さなものは身をこわばらせている。小さなものが気付かれないとき、小さなものは踏みつけられるものである。小さなものが聴き落とされているとき、小さなものは忘れられているものである。忘れているものを踏んで歩くとき、わたしは義しさからはがれてゆく。

哲学は理性の仕事を基礎づける。それはゆるぎない基盤をつくるため地面を踏み固める作業である。ところがその地面の下には、無数の小さな声が気付かれないまま埋もれてい る。だとすれば、踏み固めることは、冒涜である。

夜間飛行

文学は小さなものへの経路のひとつである。

彼は配電盤を軽くたたき、スイッチのひとつひとつに触れ、ちょっと身動きして、背中の位置をなおし、動く闇が支えてくれている五トンの金属の動搖がいちばんよく感じ取れる姿勢を探した。それから、手さぐりで、非常用ランプを正しい位置に押しやり、いったん手を放してから、もういちどさわり、ずれ落ちないことを確かめ、ふたたび手を放し、こんどはひとつひとつのレバーを軽くたたいて、それらを確実に握れるようにし、盲目の世界にそなえて指を訓練した。つぎに、指がすっかりそれに馴れてしまうと、彼ははじめてランプをつけ、操縦席を精密な機械で飾り、潜航するときのように、夜への移行を計器のうえだけで見守った。それから、なにひとつ揺れず、震えず、動かず、ジャイロも、高度計も、エンジンの回転数も安定を見せてだったので、彼はちょっと伸びをし、うなじを革の座席にもたせかけ、説明不可能な希望を味わってくれる、かの飛行中の深い瞑想のなかに沈んでいった。（サン・テグジュペリ（山崎庸一郎訳）『夜間飛行』13頁）

『夜間飛行』は、南米の夜間航路を飛ぶ小さな郵便飛行機が、巨大なサイクロンにぶつかり、かすかな無線を手繰りつつ消息を絶つ物語である。そこでは、嵐と戦う操縦士の勇気、犠牲を払いながら夜間航路を維持する人類の勝利が描かれている。しかしここで着目したいのは、もっとささやかな、ひとつずつのレバーやランプや計器を書き取ったこの段落である。読者は、操縦士が慣れた仕方でコックピットのさまざまな装置に触れ、手になじませてゆくさまを文字のうえでたどってゆく。そのとき、描出の細やかな粒度を読者は作家から借り受ける。

とはいえ、些細なものへの経路は文学の専売ではない。哲学は、瑣末なものへの経路が多様にあることを示すことができる。というのも、ひとは誰であれ小さなものをしていくはずだからだ。

ただし小さなものへの入り込み方の多様性を提示することは、小さなもののが確実な捕獲方法を教えることではない。むしろ、そうした教えを説きたいという誘惑から離れなければならない。そしてまた、小さなものに独自の価値があると言い立てようとする誘惑からも。

ジガバチの狩り

小さなものを愛し、尊敬し、深く知ろうとしていたひととして思い浮かぶのは、真夏のアルマスの荒野で何時間も腹ばいになって狩りバチやクモ、糞を丸めるスカラベを観察していたファーブルである。狩りバチの一種であるアラメジガバチがヨトウムシを捕獲する光景をかれは次のように活写している。

まずハチは、大腮（おおあご）でヨトウムシの首筋をくわえるのだ。この大腮は円筒形をしたヨトウムシの首を大方ぐるりと狭めるような、湾曲した大きな鉄（やっこ）の形になっている。

くわえられたヨトウムシは体をよじり、時によると尻尾のほうの一撃で、攻撃者を遠くまで振りとばしてしまう。

ハチはそんなことは気にもとめず、剣をすばやく三度、ヨトウムシの胸に刺す。三番目の体節からはじめて第一番目の体節までだが、この第一番目の体節には、ほかよりしつこく刺し込むのである。（奥本大三郎訳『完訳 ファーブル昆虫記 第4巻下』127頁）

ヨトウムシは蛾の幼虫である。ジガバチはヨトウムシの神経の結節点を精密に狙い、そこに毒針を刺し、麻痺させる。動きを封じられたヨトウムシはジガバチの巣穴に運び込まれ、ジガバチのこれから孵化する幼虫のための、新鮮な保存食となる。

ファーブルはこの小さな決闘を観察するために、アルマスのタイムの株を片っ端から引き抜いてヨトウムシを探す。ジガバチを捕まえる。自宅の机の上の釣り鐘ガラスに両者を閉じ込め、眼を近づける。ジガバチの体長は12-22mm。

ここには生物学者としてのひとつの理想像があるだろう。その根本にあるのは、指先ほどの大きさの昆虫が獲物の体節のひとつずつに針を刺し込むさま、それを肉眼とルーペだけで見つめきる、観察という態度である。

30年にわたって肉眼で夜空を見つめつけ、膨大な天体観測記録を遺したティコ・ブラーエ。小さなレンズを組み合わせた顕微鏡で、コルクが微細な「部屋」の集まりでできていることを発見したレーウェンフック。エーテルの中を交差してゆく光を干渉計越しに見つめるマイケルソンとモーリー。帶電させた油の霧粒を空中に静止させるミリカン。「観察」は学問の根本態度のひとつであり、それを通じて微細なものの大宇宙が開かれてゆく。

けれども、観察は小さなものに近づくための唯一の方法であろうか。そのひとつにすぎないのではないか。むしろ、「観察」のひとつ前の段階があるのでないか。

図書館と焼夷弾

小さなものは、破壊の跡に居場所を見つけている。そこで、優れたジャーナリストは破壊と小さなものを見つけて、双方が双方を引き立て合うことを知っているからだ。

ボスニア内戦下のサラエヴォ市に潜り込んだスペインの作家、ファン・ゴイティソーロは、ムスリムの文化と記憶を保存していたサラエヴォ図書館がセルビア人によって焼き尽くされたことを告発する。

そんな中、最も心の痛む光景といえば、旧東方学研究所、かの有名なサラエヴォ図書館だろう。1992年8月26日曜日、セルビア人民族主義過激派が焼夷弾の雨を降らせ、数時間でこの貴重な文化財を灰にしたのだ。(…)
実際、この犯罪を定義しようすれば、『記憶殺し』という言葉以外に当てはまるものがない。(…)
ボスニアのイスラム系住民の集団的記憶そのものであるこの図書館は、浄化の報復の炎の中に消え失せる運命を、すでに宣告されていたのである。(山道佳子訳『サラエヴォ・ノート』54-55頁、傍点は原著者による)

図書館に収められていた何千冊もの哲学、神学、天文学などの手稿本が焼失した。さらに破壊の痕跡そのものを抹消するために、跡地はまっさらに埋め立てられ「駐車場とされてしまった」(辺見庸『不安の世紀から』133頁)。文化や学問の基礎となるはずの地面が、暴力の痕跡を抹消する暴力の現場となる。

著者はこの蛮行を、廃墟全体を逐一描写するのではなく、小さな紙片を一枚取り出すことで効果的に印象づける。

焼夷弾を受けた天井の鉄骨は巨大な蜘蛛の巣のようになり、中庭の柱廊の古い繊細な石膏細工はほとんど跡かたもなく失われ、建物の内部の空間には瓦礫と梁と焼けた紙が大きな山をつくっていた。その山の中の一枚の紙片を拾って見ると、それは古文書の分類カードだった。(58頁)

ゴルティソーロは、サラエヴォ図書館が抱えていた莫大な記憶と、瓦礫の中の小さな一片の分類カードを対比させる。抹消し、隠蔽し、埋めて更地にするという“民族浄化”的工程をどれだけ執拗に遂行しても、小さなものはひらりひらりと偶然逃れ出てしまう。ジャーナリストはそれを巧く捕まえ、歴史的事件の証言者としての役割を与える。ただし、そのとき、小さなものは誌面のなかにピン留めされてしまい、身動きができない。

統合について

トラウマの精神医学・心理学は「統合 integration」を重視する。統合とは、言語化されきっていない外傷的記憶を再び語りにもたらし、体験を当人のライフヒストリーの中に位置づけ直すことである。外傷的記憶が秩序付けられた物語の中に組み込まれることで回復が始まる。現代の精神医学はこの概念を P. ジャネに帰しており、外傷的記憶を無意識の領野から“排出”することで症状を解消させようとするフロイトの考え方（除反応 abreaction）とは区別される。

現代の精神医学におけるトラウマ治療はこの「統合」概念を基礎理論としている。確かに個人の心理においてはこの統合理論の妥当性が実証されている。けれども、共同体が主に集合的記憶に病んでいるとすれば、その「治療」はどのような過程であるのだろうか。集合的な記憶と対話において、「統合」とは何を意味するのだろうか。たとえば社会がある戦災や天災の記憶を「統合」しようとするとき、もしそれが個々人の個別の記憶やパースペクティブを、ひとつの大きな物語へ同化させること、公式の意味付けに収斂させることを意味するのであれば、それは社会的な治癒の過程ではなく、サバルタンを再生産する過程に他ならない。

とすれば、集合的な外傷性の記憶やそこから生じる諸症状を、対話と健やかさに置き換えるためには、個人心理における「統合」とは別のモデルが必要である。しかしそのモデルの構造は、個人心理における統合モデルのそれと無関係ではありえない。というのも、個人心理における統合過程も結局は他者への語りを必要とするし、集合的記憶の回復は個々人の存在と尊厳の回復を抜きに進むことは無いからだ。

同化としての統合ではなく、断片的なものをそのままに尊重しつつ、なおかつさまざまな物語を複合的に再生成してゆくような仕方でつなぎあわせてゆく、そういうたった過程の可能性を探らなければならない。その可能性を示唆するものとは、主体の世界性に従わずに「ふと」現れ、日常的な意味付けに従いつつも「とまどい」を覚えさせるもの、やわらかな「まばたき」の間でいつのまにか芽吹いているもの、つまり「小さなもの」なのではないか。

ふと

ふとなにかに気づくことがある。じぶんで見出したのでも、向こうから呼び止められたのでもない。ふと意識に現れるものは、机の上の青いパンフレットや、明日の予定や、過去の出来事であったりする。

じぶんから〈ふと〉を作り出すことはできない。けれど、〈ふと〉はときを選ばない。ひとは〈ふと〉の起動を待ち構えているのだろうか。微細な変化や違和感を視界のなかにくまなく求めているのだろうか。そうかもしれない。けれども、そのような説明の仕方、つまり小さなものとの出会いを認識の主体の存在へ還元することは、避けなければならぬいだろう。

ふと見出すものは、たいてい、とるに足らないものである。ふと気づいて、そんなものかと思い直して、立ち去ってしまう。それによって〈ふと〉が完成する。ふと気づいたものを手放さず、その現場から摘出し、徹底的に観察分析するとき、小さなものは怯えている。こうした分析によって、対象の詳細なデータは次々ともたらされるけれど、〈ふと〉のふとしたかんじはもう損なわれている。

〈ふと〉はゆるみの体験である。これに対して、発生する事象や記憶を徹底的に洗浄するような、確かな方法論がある。それは現場鑑識官の目つきである。そこではすべての意味が秩序立った連関を持ち、ノイズはノイズとして整頓される。こうした緊張がゆるみ、何を見るのでも何を探すのでもないとき、〈ふと〉がある。なにかが息をしている。

とまどい

戸惑いとは元来、闇夜に目覚めたとき、自分の位置や場所が定かでなくなるさまを言う。眠りから醒めたとき、醒めたということだけがさしあたり与えられているけれど、そのほかには確かなものがまだ何もなく、姿勢すら実は曖昧な暗夜の湖水に浸かっていて、足の指や腰をわずかに折り曲げているうちに体がわたしに追いつく。ところがもっと大切なことは、目覚めのさなかでここはどこであるということが掴まれないまま視点が定まらない、あのわずかな時間である。そこでは視線が決定的に重要な無能ぶりを發揮していて、たしかにここはここという安定した据え置かれ感覺もなければ、不安定なところで崩落しかけっていたりバランスをぎりぎりのところで保っていたりするのでもない。役名を知らされぬまま突然舞台に放り込まれ、周囲の役者の様子や大道具小道具の具合から、じぶんの言うべきセリフをおずおずと推測して言上するのに似ている。視線はようやく慌て始め、視界のあちこちでこぼこや光のむらに向けて、迅速な問い合わせを開始する。ドアを叩き、電話をかけまくる。するとようやく、世界の方から親和性が滲みでて、意味という腕によつてわたしを介護する。こうした目覚めのとまどいは、引っ越したばかりの朝とか、旅行先の宿でしばしば起きるけれども、住み慣れているはずの部屋の天井とベッドの間でもときたま起きる。

けれどもまた、日中たしかに覚醒しているときにも、ふいにとまどうことがある。なにかにとまどうとき、その何かが何であるかはたしかに明晰であるのに、身動きができないでいる。何かにとまどっていないとき、現れているものはつねにわたしに次に何をすべきかを命じている。本の背表紙は、その天辺に指先をかけて本棚から本を引き出すか、あるいは書名を教えて無視することを命じる。わたしの右手によって引き出された本はわたしの左手の手首に自身の重みを支えることを命じ、次いで右手の指先を貞のあいまにすべりこませて本を開くことを命じる。開かれた頁のおもてに印字された段落と行は眼を吸い付ける。次から次へと、意味のドアが連鎖的に開いてゆく。ところが、なにかにとまどうとき、そのドアの連鎖が絶たれている。シュツツによれば、わたしたちが対象を把握するとき、その対象の意味の核心に未規定の地平が伴われている。とまどうとき、意味の核心は明晰であるのに地平の未規定性が頑として未規定のままである。落ちても割れない卵のように。

小さなものにとまどうとき、わたしはそれが何であるのかはっきりとわかっているけれど、それに対して何をすればよいかわかっていない。手すりから突然飛びたった鳥たち。アスファルトを横切るぎらぎらしたトカゲ。学習支援室の花瓶の花を昇り降りするアリ。英和辞書のなかの *rara avis* という語。バスのなかで西陽に手をかざす女。そのとき、小さなものにとまどうひとは、小さなものを前にして足を止めている。小さなものは、全くの非力さにもかかわらず、全身を投じた奇襲によってわたしの動態を封じる。

まばたき

小さなもののがそっとこちらの出方を伺っているのだとしたら、たぶんそれは、ぎゅっと一点を貫くような視線のもとにじぶんの身を晒すようなことはしないだろうし、きょろきょろと周囲を見回す視線に対しても身を隠してしまうだろう。小さなものは、やわらかなまばたきとまばたきの間のなかにのみ、目配せを送る。まばたきがその目配せを受けたり、力みのない視線がひとりでにそこに吸い込まれてゆくとき、小さなものがまったく小さなまま現れている。

まばたきとは眼球を保湿するための瞼の高速度の往復なのではないし、視野に対する黒く明るいシャッターなのでもない。また、瞬間とは切り詰められた一定時間なのではないし、まばたきは時間を切断する作用なのではない。むしろそれは、視線と視界を更生させる、再契約のはたらきである。まばたきのことで、視線と視界はゆるみ、ゆらぐ。まばたきのたびに、ひとは視界への没入から引き離される。新たなブネウマがそこに吹き込まれる。芽吹きのゼンマイが巻き直され、ほどかれる。まばたきの先に小さなもののはざみ原がある。

これに対して凝視は一点に視線を集中し、その点から溢れだすものを一滴たりとも逃さないとする。凝視は恋人の目に注がれるとき情熱の表現となる。けれども、じっと動かない視線はどこか異様なもの、異常なものに近づいてゆく。一点へ注意を固定させているとき、周囲への目配りが削ぎ落とされている。ある対象を全体との関係において柔軟にとらえなおしてゆくという姿勢が失われている。視線の固着は狂気や不気味さに近づいてゆく。

凝視と死者

開かれたまま一点を見つめて動かない視線が不気味なのは、なぜなのだろうか。もっとも静止した視線は、死者のそれである。ひとが視線を動かさず眼を見開いているとき、ピントの向こうで、死者と眼が合っている。

広島の被爆者の精神状況を分析した R. J. リフトンは、被爆者が原爆死者の視線を「内面化」していると述べている。

すでに見てきたように、死者に凝視されると、不当な仕打ちを非難されているとすれば罪意識を意味するものであり、生きのびようとして「我欲」を人前に「さらした」ととれば、それは廉恥心を意味することになる。しかし、ここでおこる基本的な心理過程は、生存者が、同じ人間として自分の非を責める目の所有者と一体化してゆくところにあるといえよう。つまりここで生存者は、自分に対する死者の見方と思われるものを内面化し、その結果、その「目」でもって死者から「いのちを盗んだ」ものと「自分を見る」にいたるのである。(『ヒロシマを生き抜く（下）』319-320 頁)

被爆者は自分が生きのびたことに罪意識を持っており、その罪意識は、自分が死者から凝視されているというイメージによって具体化される。生存者は、自身のあらゆる行動が死者によって倫理的に審査されていると感じている。

リフトンはこの心理過程を内面化もしくは「死者との同一化 identification with dead」と呼んでいる。しかしここで被爆者に生じているのは、生者と死者が融け合ったような一体化ではなく、生存者の在り方に深く差し込まれた死者が、あくまで他者として視線を送り続けているという事態であるように思われる。それは生存者にとって、死者を生かし続けるひとつの方策である。

したがって、生存者は死者と一体化してゆくが、それは死者の凝視を真っ向から受け止める、静止的な対面関係としての一体化である。若きレーヴィットが言うように、この「わたしーきみ」の対面関係は世界の根本構造にさえなりうる。

けれども、ひとは死者の直視にずっと目を合わせていることはできない。ましてや、その状態で学問を始めるすることはできない。すると、2つの方策がありうる。ひとつは、瓦礫の下に死者を埋め戻すこと。もうひとつは、目を伏せ、目配りをほかに転じ、まばたきを始めること。

ライラック

被爆者についての同じ本のなかで、リフトンは「死者の眼」について次のような証言を収めている。これは、先ほどの「凝視」とすこし毛色がちがうように感じられる。

「新聞も、政府も、広島には七十年間、木も草も生えないといっていましたが、いち早く美しさを取り戻した川を眺めたとき、町がそのように不毛になったとは信じられませんでした。私は泥や土や草や木について詩を書きましたが、広島の土は死人の骨と混っており、そこから生えた草や木は、比喩的に表現すれば、死人の目だと思いました。死人は私たち生き残った者を見守っているのだと思いました。だから、草や木を見ると、現在や未来のことを建設的に考えざるを得なかったのです。私は正直に真実に生きようと決心したのです。」（『ヒロシマを生き抜く（上）』164-5頁）

これは、なんだろう。ふしげなかんじがする。この「ある著名な初老の被爆詩人」（164頁）の証言では、死者の眼は生きのびた者を厳しく咎め監視するのではない。むしろ生きのびた者の再起を見守るまなざしである。しかしその眼は、焼け跡から生えた若木や草でもある。それらは、死者の骨が混じった土壤から生えてくる。

このイメージはエリオットの長編詩『荒地』の冒頭部分と、どこか響きあう。

四月はこの上なく残酷な月、
死の大地からライラックを育て上げ、
追憶と欲望をかき混ぜ、春の雨で
生氣のない根を奮い立たせる。
(福田陸太郎・森山泰夫訳)

すなわち、死者の骸を抱えた肥沃な土から新たな生命が沸き立つというイメージであり、大地と季節の循環の中に万物の腐敗と更新が取り込まれてゆく感覚である。リフトンはこの自然観にも言及しているけれど、かれはもっと単純なこと、つまり眼と芽の同根性を見落としているように思われる。死と再生の循環の内部で、感覚の先端にあるやわらかさが「め」なのではなかったか。氾濫原から生い茂る草や若木の芽吹きは、深い眠りから開くまぶたの目覚めでもある。

それから…、それから…、

体系性や論理性に支えられた強靭な方法論とはまた別の、小さなものへの経路があるはずだ。断片を構造の中に固定するのではない、といつても無節操な連想や羅列でもないつなぎ留め方である。

その経路のひとつは、封じ込まれていたものを聴いてゆくという営みのなかにもあるのではないか。スヴェトラーナ・アレクシェーヴィチ『ボタン穴から見た戦争』はそうした可能性を示しているかもしれない。本書は第二次大戦中に白ロシアに住んでいた子どもたちの証言集である。この本では、断片的なものに出会い、それをそのままに保ちながら繋ぎあわせてゆくという作業が二重の仕方で行われている。

ひとつは、101人の子どもの証言を、著者のコメントを挟まずに配列してゆくという作業である。証言の内容はひとりひとり異なっているし、共通したパターンや要素を含んでもいる。証言の総体は白ロシアという地理的空間、第二次大戦という歴史的・政治的意味によって包摂されており、ひとりひとりの証言から戦争のかたちが縁取られてゆく。けれども個々の証言は核心にある明瞭な意味の地として沈んでしまうのではなく、つねに全体の中に組み込まれるものとして留まり続ける。

もうひとつは、ひとりずつの語りの内容そのものがもっている、論理性や整合性や秩序付けられた順序とは別の内的なつながりを傷つけずに、それらの語りを読まることばへと受け止め直す作業である。開戦の日や終戦の日や肉親の死といった特定の記憶時刻へのショートカット（「戦争が始まった恐ろしい日のことはよく覚えています」）、穏やかな時系列（「それから…」「その後…」「しばらく経って…」）、時系列とおおまかに連動した地理的移動（疎開、避難、故郷への帰還）、ふとした想起の挟み込み。これらは、子どもたちの取るに足りない話、ささいな身振り、断片的な印象は、この諸法則のもとでのみ朗らかな呼吸と波形を保ち、しなやかな蔓を伸ばしてゆく。しかしその隠れたつながりは、合理性や体系性をもとめる視線のもとで真っ先に統合され、解体されてしまう。

瓦礫について

去年南三陸町を訪れたとき、海の近くに土が何層にも積み重ねられていた。以前の地名や丁目の位置感覚が少しづつわからなくなっている、と町のひとが言っていたような気がする。盛り土は町全体の埋葬ではないかとおもった。瓦礫はずっとまえに積み上げて焼いたという。そのときの写真を見せてもらった。町全体の火葬のようにおもえた。

瓦礫とはなんだろうか。瓦礫とはかつて建物を構成していた壁や天井や床が、大きな力を受け止めることによって、碎かれたものである。材質としてはコンクリート片、ねじまがった鉄筋、割れた板である。では瓦礫は建物の骸であろうか。瓦礫は破断面を持ち、かつての壁面と、壁の内側とが、ひとしく瓦礫の多面体を構成する。それは損壊した遺体片に似た生々しさを醸し出すかもしれない。けれど人間の死体と違って、瓦礫は腐敗しない。瓦礫は撤去されない限りそこにあり続ける。瓦礫こそは風化や忘却に抗う。瓦礫は撤去されない限りそこにあり続けて、そこにつかて何かが立っていたことを示す。けれどそこに立っていたものを具体的に同定するためには、記憶や記録など、瓦礫以外のものに頼らざるをえない。瓦礫そのものからかつての建物を推定することは不可能だし、瓦礫を組み合わせなおして元の建物を復元することもたいてい不可能である。指示示されているけれど指示示され得ていないものをめぐって、想像力の起動が要請される。けれど、そのこころみはじきに猥雑なものとなる。

瓦礫は完璧な完了形である。何かがそこで起きて、瓦礫そのものにはもはや何の発展も秘められていない。見分けがつかず、数もなく、確たる大きさもない。ただ無意味な重さ、質感、埃っぽさだけがある。けれども素手で触れると痛い。瓦礫の意味は、それを撤去するか、迂回するかである。そのいずれもさしあたり選ばないとき、瓦礫の独特的、静かな無意味さが現れる。

しかし実際に行われてしまうのは、瓦礫に何らかの意味、とりわけ感傷を見出すことである。焼け跡のロマンティシズムと名付けられるべきこと、すなわち悲嘆と感傷をとりちがえ、喪を追憶と懐かしさにすりかえることが、愛国者たちのやり方だった。瓦礫の中からことばを探り当てる手間を省き、早急に意味連関を復興させようとするこころみである。それはもっとも非倫理的な行為だとみなされねばならない。

区画整理

瓦礫のものとどまることは、無意味さや静けさを保つことである。けれども、瓦礫はすぐに撤去されてしまう。激しい力の発現がもたらした真空に意味が充填される。瓦礫の撤去とともに区画整理が始まる。区画整理は、そこで破壊が起きたという痕跡を消し去り、そこにつけてあった街や歴史のこまかに襞を抹消する。整然と引き直された道路と区画のうえに、新しい地名が貼られ、復興が始まる。

区画整理は死者の犠牲者化と連動する。日本で初めて大規模災害死の公的な意味付けが行われたのは、関東大震災後の区画整理事業呼びかけにおいてである。

我々東京市民は今やいよいよ区画整理の実行に取りかからなければならぬ時となりました。

第一に我々が考えなければならないことは、この事業は実に我々市民自身がなさなければならぬ事業であります。決して他人の仕事でもなく、また政府に打ち任せて知らぬふりをしているべき仕事ではない。それ故にこの事業ばかりは我々はこれを他人の仕事として、苦情をいったり批評をしたりしてはいられませぬ。(中略)

もし万一にも我々が今日目前の些細な面倒を厭って、町並みや道路をこのままに打ち棄てておくならば、我々十万の同胞はまったく犬死したこととなります。我々は何としてもこの際、禍を転じて福となし、再びこの災厄を受けない工夫をせなければならぬ、これが今回生き残った我々市民の当然の責任であります。後世子孫に対する我々の当然の義務であります。(中略)

我々東京市民は今や全世界の檜舞台に立って復興の劇を演じておるのである。我々の一舉一動は実に我が日本国民の名誉を代表するものである。(東京市編『区画整理と建築』、越沢明『復興計画』中公新書、65-6頁より孫引き)

ときの東京市長永田秀次郎は言う。復興は国際社会における帝国の威信をかけた事業であり、復興事業の成否は区画整理に懸かっている。区画整理が頓挫することは死者の死を「犬死に」とすることである、と。つまり、区画整理を成功させることができると、その死に意味を与えることになる、というのが永田の論理である。

ここでは、〈死者〉が近代的な語義での〈犠牲者〉、すなわち〈公的に意味づけられた死者〉に変質させられている。なぜかれらは死んだのか、その死をどう受け止めればよいのか、という問いの答えが国家によって指定され、同時に、その大義のもとで「些細な」ものが抹消されてゆく。地下の声は閉じ込められ、踏み固められた土地に新たな帝都が出現する。

ところで、哲学や学問もまた、区画整理を手助けしているのではないか?

弁証法と血小板

何かを学び、掘り下げて考えることが、結果として、過去の破壊や暴力の跡を隠滅するはたらきを持っているかもしれない。その跡地から次のことばが生まれるのを待つことなく、大急ぎで意味を塗りつけることによって。

外傷的体験からは、それを語ろうとする意志と、沈黙しなくてはならぬという意志が同時に生じる。この「弁証法」のゆらぎの合間で現れることばは、しばしば「断片的で、整理されておらず、信用を失わせる」性質のものだと J. ハーマンは述べている。加害者は、証言に合理性や論理性、首尾一貫したものが無いと指摘することによって、暴力の痕跡を小さななものに押し込める。90 年代アメリカにおける「偽の記憶」論争や、日本の戦後史における従軍慰安婦論争は、いずれもこの「言葉の混乱」をバックラッシュの起点としてきた。

しかし論理性や首尾一貫性といったことは、一定期間の意識の緊張の結果にすぎない。必要なことは、無傷の世界から殺到する意味の群れから、言葉の混乱を守ることではないか。それは小さなものではない、それはあまりに有意味すぎる、というように。それは血小板がにじみ出て凝固するまでの時間をかせぐことである。

巡礼

すでにこわれてしまったもの、とりかえしのつかないもの、手を握り返してこないもの。瓦礫の下に埋もれているもの、地面の下でじっと目を見開きつづけているもの。ひとはそれを正視できず、そのことばを直接書き留めることはできない。そこから眼を逸らしてしまう。けれども、代わりに地上のものを凝視することも、眼を閉じて黙祷の中に閉じこもることも選ばないとき、まばたきの先に小さなものが現れている。そのもとに足を止め、小さなものにゆらぎなおすことは、直視しえないもの、ことばをつなぐことのできないものへ、立ち戻すことである。

迂回しながら立ち戻るとき、小さなものはまだ確固とした意味を根付かせていない。それは〈ふと〉や〈とまどい〉において現れ、断片や嘘のなかで明滅している。しかしそうすることによって、わたしの知覚から溢れた小さなもののは芽の群生は、ある瞬間に世界から永遠に切り離されたものが遺したことばの傷口を埋め尽くしているのではないか。

閉ざされた沈黙でもなく、追憶に没入する祈りでもなく、開けた静けさの中で小さなものへ眼をひらき、まばたきを繰り返してゆくこと。すなわち、地から生えたあらゆるもの、ゆびさきにふれるもの、つまさきで踏んでいるもの、聞こえてくるもの、思い起こされるもの、遠近の眺望にはいるもの、そのすべてに、小さなもののは可能性のなかで出会うこと。すなわち、死者のからだから伸びたもの、死者のゆびさきが触れたもの、死者が埋もれている場所、死者の声がふくまれたもの、死者の存在の残響として、それらに出会うこと。それは、眼を開けたまま祈ることである。

参考・参照文献

- 市村弘正『増補 小さなものの諸形態 精神史覚え書』平凡社ライブラー、2004年。
- 岸政彦『断片的なものの社会学』朝日出版社、2015年。
- 柳田国男（柄谷行人編）『「小さきもの」の思想』文春学藝ライブラー、2014年。
- サン・テグジュペリ（山崎庸一郎訳）『夜間飛行』みすず書房、2000年。
- ジャン=アンリ・ファーブル（奥本大三郎訳）『完訳 ファーブル昆虫記 第4巻（下）』集英社、2007年。
- ファン・ゴイティソーロ（山道佳子訳）『サラエヴォ・ノート』みすず書房、1994年。
- 辺見庸『不安の世紀から』角川文庫、1998年。
- ロラン・バルト（花輪光訳）『明るい部屋 写真についての覚書』みすず書房、1997年。
- アルフレッド・シュツツ、トーマス・ルックマン（那須壽訳）『生活世界の構造』ちくま学芸文庫、2015年。
- スヴェトラーナ・アレクシェーエヴィチ（三浦みどり訳）『ボタン穴から見た戦争 白ロシアの子供たちの証言』岩波現代文庫、2016年。
- 九鬼周造『「いき」の構造 他二篇』岩波文庫、1979年。
- R. J. Lifton, *Death in Life: the Survivors of Hiroshima*, Random House, Inc., 1968.
- R. J. リフトン（榎井迪夫ほか訳）『ヒロシマを生き抜く 精神史的考察（上・下）』岩波現代文庫、2009年。
- T. S. エリオット（福田陸太郎・森山泰夫訳）『荒地・ゲロンチョン』大修館書店、1982年。
- 森一郎『死を超えるもの 3・11以後の哲学の可能性』東京大学出版会、2013年。
- 越澤明『復興計画 幕末・明治の大火から阪神・淡路大震災まで』中公新書、2005年。
- 宮地尚子『環状島=トラウマの地政学』みすず書房、2007年。
- K. レーヴィット（熊野純彦訳）『共同存在の現象学』岩波文庫、2008年。
- K. レーヴィット（三島憲一訳）『ヘーゲルからニーチェへ 十九世紀思想における革命的断絶（上・下）』岩波文庫、2015-2016年。
- J. ハーマン（中井久夫訳）『心的外傷と回復（増補版）』みすず書房、1999年。

※ 本稿は、第39回臨床哲学研究会（2016年7月30日）での発表原稿に加筆修正したものである。

補記 論文としての投稿について

このアガクレートを「論文」という形式で投稿することにあたっては、若干の躊躇がないわけではなかった。はじめて読む人がとまどうだろうから。とはいっても、この書きものが「論文」なのか「エッセイ」なのか、ということには関心を持たなかった。ただ、わたしはこの書きものをこのうえなく大切に扱ったし、他の人もそうしてくれたなら、とても嬉しい。

この書きものが「論文」であるか否か、そもそもそうした分類が必要であるか否かという判断に関しては、読み手に任せたい。みんな好きなように読み書きすればよいとおもう。わたしはただ3つのことを見た。

ひとつは、この書きものを、小さなものを作りるように、大切にすること。

ふたつめは、この書きものを『臨床哲学』に投稿したいということ、そこにかかるひとびとに読んでもらいたいということ。「小さなもの」は臨床哲学研究室で生まれた。あのひとびとの中でのみ、わたしは「小さなもの」を書き、読み、応えることができた。他の場所や他のときでは、この書きものを発表することは決してできなかった。

さいごに、小さなもののもとめる仕方でこの書きものを仕上げること。文体が詩的に傾きすぎているのではないかという批判もいただいたし、一頁ごとに断片を重ねてゆく構成が順序立てた理解を妨げるという指摘も想定している。けれど、実際どの頁からでもよい、この書きものの内へ入り込んでいただければ、この形式が「小さなもの」と出会うための方法のひとつであることがおわかりいただけるはずである。これが最良かどうかはわからないけれど（もとより最良の方法を煮詰めることが目的ではない）、少なくとも、「問い合わせの所在」から始まって「結論」で締めくくられる一般的な論文の形式は、小さなものたちにとっては、肉牛解体的な工程に思えた。こうした形式を用いつつ、小さなものを作りやすやかに指示することのできるひとともいる。しかしあたしの場合、小さなものを取り逃がすところか、踏んづけていることすら気づかない、という恐れを持った。だからこうした形式を探るよりはむしろ、頁と頁のあいだ、段落と段落のあいだ、ことばとことばのすきまが、結んだり開いたり、ほどきあったり共振したりするようななかたちを探るほうがよかったです、それは楽しかった。

結局のところ、書いてみると、こう書くしかなかった。どこが末尾か始まりかもよくわからない。完全に書き尽くしたという気分もない。「前進というよりぐるぐる回り」（『臨床哲学ニュースレター』創刊号、25頁）をしていった。環状島の波打ち際の歩き方、グラウンド・ゼロへの巡礼とは、そもそもそういうものだろう。